転機としての1935年ロンドン「中国芸術国際展覧会」
－1939年の「伯林日本古美術展覧会」の開催経緯をめぐって－

安　松　みゆき

【要　　旨】

1935年11月から翌年３月にかけてロンドンで開催された「倫敦中国芸術国際展覧会」は、西欧における東洋への関心において、日本ブームから中国ブームへと転換したひとつのマイルストーンとしての価値が指摘されている。この展覧会を、1939年に開催される「伯林日本古美術展覧会」の開催経緯と並行して考察することによって、単なる国家間の文化交流でなく、まさに第二次世界大戦へといたる日中英独の４ヶ国間の当時の政治的な動向に合わせて芸術展覧会の開催が決定していたことを裏付けるものであり、特にそれら国家間において政治的な役割を強く担った動向であったことを明らかにした。

【キーワード】

1939年ベルリンの日本古美術展、ロンドンの中国芸術国際展、英中文化関係、日独文化関係

はじめに

1939年にドイツの首都ベルリンで、御物、当時の国宝、重要美術品が３分の２を占める日本の古美術展覧会「伯林日本古美術展覧会」が開催された。その開催経緯についても、様々な角度から考察してきた[1]。

本論では、これまで残されていたもうひとつの経緯、すなわち1935年にロンドンで開催された「中国芸術国際展覧会」との関係に注目して、「伯林日本古美術展覧会」が、政治的な思惑から実現に結びついた経緯の一端を明らかにしたいと思う。「中国芸術国際展覧会」については、東洋美術の動向を示す重要な事例として、範麗雅氏や塚本魔充氏等の研究が認められる[2]。ただし、これらの研究では、同展覧会の全容と東洋美術の価値に焦点をあてた成果を見いだせるものの、その後の1939年の「伯林日本古美術展覧会」との関係で考察されてはいない。本論では、当時の日本側の新聞記事を主な資料に用いて考察をすすめてゆく。なおこの展覧会の表記だが、「中国芸術国際展覧会」、「ロンドン中国芸術国際展覧会」、あるいは当時に「支那美術大展覧会」や「支那美術展」、「倫敦中国芸術国際展覧会」と様々に呼称されていたが[3]、ここでは以下、当時の展

覧会図録での表記を参考にして「倫敦中国芸術国際展覧会」の名称を用いる。

1　1935年開催「倫敦中国芸術国際展覧会」について

「倫敦中国芸術国際展覧会」について詳細に検討してきている範麗雅氏の論文「1935年のロンドンにおける『中国芸術国際展覧会』－中国の伝統的芸術・文化に関する英国知識人の言説の検証を指標に」によれば、1932年末頃に、パーシヴァル・ディヴィッドを中心とする英国のコレクターたちの意向からはじまって同展覧会がロンドン王立アカデミーによって開催されることになったという[4]。開催の目的は、中国文化の卓越性を内外に示すことと、政治的に日本に侵略された中国を支援することであった。開催場所は、バーリントン・ハウスで、1935年11月28日から1936年３月７日までのおよそ三か月半の会期で行われた。12月17日には国王ジョージ五世と皇后メアリーが展観し、会期中41万人余りの観客が会場に足を運ぶなど、大盛況となった。

出陳された作品は、故宮博物院、古物陳列院、中央研究院、北平図書館、河南博物院、安徽省図書館等に所蔵され、その数は全体でおよそ４千点に及ぶとされ、「考古文物から陶磁器、絵画、玉器、家具、織物、漆器、書斎用文具まで、あらゆる美術品や工芸品を含んでいた」という[5]。英語と中国語で併記された４巻本の展覧会図録『参加倫敦中国芸術国際展覧会出品図説』と中国語による同展図録『参加倫敦中国芸術国際展覧会出品目録』[6]に掲載された作品は、分類毎に、食器、楽器、鼎等の銅器108点、陶器磁器では、宋時代の作品118点、南宋時代86点、元時代22点、明時代139点、清時代302点、書画では、唐時代の絵画３点、五代の絵画３点、宋代の書画55点、元代の書画41点、明代書画43点、清代書画29点、その他、織物29点、玉器70点、景泰藍16点、漆器５点、摺扇20点、珍本古書30点などであった。これらの作品は、英国の東洋学の専門家に賛否両論があったものの、類別でなく、時系列に、文化的な要素にそって各王朝の四国の芸術品として展示されたという[7]。

2　矢代幸雄と「倫敦中国芸術国際展覧会」

当時英国との関係において美術史界で最も近い立場にあったのは、サンドロ・ボッティチェリの論文を1925年に英国で出版した美術史家矢代幸雄である[8]。矢代はこの展覧会についても様々なコメントを残しているので、矢代の言説をここで振り返ってみたい。

矢代によると、国外における日本美術の収集は、「２、30年来の支那美術の流行」などに押されて劣勢に陥っており、「海外で日本美術が収集され、増強される機会を全く失い、日本美術贔屓の人々は、最早日本美術について目新しいもの面白いものを見ることも買うこともできなくなり勢い支那美術に転向せざるを得なく」なり、「従って支那美術の流行と賞賛とが一層世界的に燃えあがる結果になった」という[9]。

そして矢代は、その典型的な動向としてとりあげたのが、1935年にロンドンで開催された「倫敦中国芸術国際展覧会」である。それより四半世紀前の1910年にロンドンで開催された日英博覧会で、多くの人々に日本美術の影響を与え、日本贔屓の人々を育てた状況と対照関係に据えて、「倫敦中国芸術国際展覧会」に言及しているのである。

矢代によれば、「倫敦中国芸術国際展覧会」は、「中国政府の国力を挙げての協力によって、出品実に三千余点、単にロンドンを支那美術一色に塗り潰したのみならず、その影響はパリその他の欧州大都市の流行界に及び、欧州各地及び米国より見物旅行団がロンドンにくり込んだような騒ぎで、欧米に於ける東洋趣味は完全に日本から支那に転換させられてしまった観」があった[10]。

しかも、矢代はちょうどイギリスで日本美術の講義をするために派遣されていたが、ロンドン大学では、日本美術では人があまり来ないだろうから、中国美術の講義に変更するように求められて、それに応じて講義をした結果、多くの聴衆が集まったことを、「皮肉にも」という言葉を交えつつ伝えている[11]。

矢代はさらに、この状況について、日英博の影響力の薄れる時に、中国美術の優品の展示によって、中国本位に東洋美術を考えるようになり、「東洋美術の鑑賞に於て、日本支那の位置が完全に逆転する契機になったのである」と述べている[12]。この指摘の際に、矢代は、ヴィクトリア＆アルバート美術館の館長にレイ・アシュトンが就任したのも、同展覧会の幹事だったことが意味するとして、美術組織がそうした現状を敏感に受けとめて動いていることを付け加えている[13]。

こうした矢代の体験と指摘からは、「倫敦中国芸術国際展覧会」が、国を挙げて相当に優品を数多く展示することで、日本美術への関心を完全に中国美術への関心に転化させた展覧会であったことがわかる。

しかし、矢代はなぜこの展覧会がこの時期に実施されたのか、また、なぜイギリスだったのかについては、言及していない。ただ、日本贔屓が途切れる原因に、海外にある日本美術が貧弱であり、かつ日本美術の輸出禁止強化によって、「日本美術鑑賞の源泉を海外に杜絶した」ことを挙げている。このことは、実際に1939年のベルリンでの日本古美術展の際に、矢代が同様の意向を明示したことに結び付く[14]。つまり、1939年の展覧会開催中にその開催を祝ってなされた講演会で、矢代は、海外には浮世絵の名品があるものの、それ以外に良いものは、わずかしかなく、粗末な作品が日本美術と思われている現状を指摘し、国内の保存とともに、「海外に日本美術の優秀性を世界に示し」てゆくべきことを主張していたが、それは、まさに1935年の「倫敦中国芸術国際展覧会」での問題を、矢代は改善するために、海外での日本美術の所蔵に対する質の向上、そして海外での優れた展覧会に力を入れ、その成果が、1939年のベルリンの日本古美術展に結び付いたといえるのである。とはいえ、矢代は、1939年のこの展覧会開催には、例外的に「政治的意図から立派な国外出陳になった」として評価して[15]、あくまでも「政治的意図」で実施し得たと理解していた[16]。この点については、別稿で指摘したとおり、たしかに最終的には政治的な力による開催になったものの、ドイツ側の美術史家たちの願望は、政治とは切り離されてすでに1909年頃から認められるものであり、そうした動きを根底に据えた模索のなかで、最終的に政治的な動きによって実施された可能性があることを補足しておく[17]。

３　日本の新聞記事と「倫敦中国芸術国際展覧会」（１）参加をめぐる問題

「倫敦中国芸術国際展覧会」について、東京朝日新聞に探し得た関連記事を参照すると、開催参加をめぐって問題が生じていたことがわかる。本節ではそれを紹介しながら、日本側の「倫敦中国芸術国際展覧会」をめぐる動向を振り返り、そのなかからこの展覧会の特徴を明らかにしたい。

気になる問題が新聞にとりあげられたのは、1935年３月27日付朝刊の記事においてであった。記事の見出しに「英京の『美術展』にお相伴は御免だ、参加説と対立状態」とあり[18]、「倫敦中国芸術国際展覧会」への参加に対して、反対派がいたことで、かれらをいかに説得するのかが問題となっていた。しかも時期を考えると開催半年前のことであり、かなり切迫した問題だったといえる。

記事によると、ロンドンから東洋美術の世界的権威者であるラファエル氏が３月25日に来日

し、展覧会への日本所蔵の国宝および重要美術品の出品を依頼して来た。それに対して受け入れを否定したのが、当時文化財の調査委員会会長の瀧精一であった。記事に「参加反対の急先鋒」として紹介された瀧は、参加できない理由に、今回の展覧会への参加が「おつきあい」によるもので、また日本に所蔵する古美術が「昔は出開帳だったが、今は時勢がちがう」こと、さらに「展覧会委員長がリットン卿のため、日本の人気がよくない」と三つの要因を挙げていた[19]。

瀧にすれば、今回の展覧会は、名称からしてあくまでも中国が主体であり、その意味で、日本からの参加は「おつきあい」と理解されることになるのには、異論はない。また、瀧は重要美術の調査委員のため、当時の国宝や重要美術品の海外流出を食い止めようとしていた立場からすれば、「おつきあい」程度で、危険をはらむ海外搬出を考えるはずもない。

ここで留意されるのは、日本側の人気がない理由として、リットン卿の存在が挙げられていることである。リットン卿とは、記事にも「リットン報告書で有名なリットン卿」と紹介されているように、当時の国際連盟より満州事変と満州国について調査を依頼され、日本側にも理解を見せる面を示しつつも、大方は日本側に不利な結果を提示したことで知られる。瀧のリットン卿に対する評価は、すでにそのような評判が定着していたと捉えられるものであり、さらにそれが、本来政治的な目的とは無縁であるはずの芸術展覧会の参加にも、大きな意味を持っていたことを示している。

その後、５月５日の朝刊では、瀧の反対にあってラファエルが一旦上海に戻り、改めてまた交渉するために５月４日に来朝したことが、伝えられている。しかし、それをはねのけるかのように、約二週間後の22日の同新聞では、明確に「日本不参加を表明」のタイトルが踊っている。イギリスからラファエルだけでなく、ホブソン、ディヴィット、ユーモルフォブロスの３名も交渉のために東京に出向いたものの、国宝や重要美術品の国外搬出が、瀧が会長である重要美術調査委員会が動かないために不可能な事情となり、日本側は参加しないことを決定したことで、それを伝え聞いた４氏は、24日に横浜を出港したという。また新聞には、搬出の問題以外にも振興会が出来て一年しかたっておらず、展覧会開催まで時間がないことが、不参加の理由に挙げられていた[20]。

しかし、それが突然一変し、最終的には御物の交渉が進められるまでになる。９月４日付けの新聞に、「大国の襟度を示し、英京展に出品、日本に残る支那古美術の一品、民間有志の熱意で」の記事が掲載された。突然の転換だが、日本側の不参加が決まったまま、民間で参加の工作を進めている、という日本政府と民間との二つの立場が存在することを示した内容であった。

ここで参加を実行したのは、日英協会とその関係者である。そこに元駐英大使林権助男爵[21]、細川護立公爵[22]、杉総長、濱田耕作[23]、松平慶民子爵[24]、門野重九郎[25]らが関与することで、日本に所蔵される作品の出品が実現されることになった。記事によれば、イギリス側に対して「支那展」の後に日本の美術展を開く計画があり、それを踏まえて民間中心の日本側は、積極的な参加を考えているという。

宮内省からは、「英帝」の即位25周年を記念して、御物を貸し出すことをすでに決めているとされ、前述した関係人物たちは、「国際支那美術展覧会出品委員会」を組織して、その他多くの重要美術品の出品を考えていた。貸与される御物とは、中国古代の食器の一種で、明治初年に山内家から献上された「麟盃」の六朝以前の作とされ、高さ８寸、直径１尽の大きさで、麒麟の彫刻が古座稀田のものである[26]。その一方で、そうした民間の動きに対して、依然として調査委員会会長の瀧が強硬に反対しているので、出品作品をめぐる重要美術調査委員会の開催で波紋が免れないことも、不安視されていた。

いずれにせよ、日本政府の不参加からは、重要美術調査委員会という一部の意向が大きく反映

されていたことが、ある面明らかになったためか、それでも強硬に反対の立場にあった調査委員会会長の瀧は、展覧会終了間際に、これまでの事態への反発から会長職を辞任する意向を公にした。昭和11年２月８日の朝刊に、「美術界に突如一投石、『文部省反省せよ』と職を課す瀧博士、海外搬出のもつれ／文部省側の弁＜写＞」の見出しが踊った[27]。記事によれば、瀧は重要美術調査委員会会長の職を、昨年末11月に文部省に辞表を提出したが、その辞任の裏には、「文部当局との間の確執があった」という。その具体的な内容は、「倫敦中国芸術国際展覧会」でのこととして詳述されており、この展覧会に、文部省、外務省、日英協会で設立された出品委員会側が、重要美術品の海外搬出禁止論があったにもかかわらず、それを押し切って、最終的に「重要美術品６点、その他35点の古美術」をロンドンに搬出し[28]、さらにそのなかには、国宝に準じる名宝と、また「相当にいかがわしいもの」も含まれていたことから、瀧は憤慨したと説明されていた[29]。

同様の瀧の立場は、日本美術の権威的雑誌で、瀧が編集していた『国華』第46編第１冊においても認められる[30]。記述者不詳のその記事では、同展に58点もの作品が展示されたものの、英国側の期待に沿うものとならなかったことと、古美術の国外搬出が日本では困難なことが指摘されている。そして今後同様の要求があった場合に、いかに対応すべきなのかという問題を提起して、「不十分なる事で終るべき運命に在る古美術の出開帳を止めて欲しい」と、きっぱりと古美術の海外での展示を固辞し、そのかわりに美術館を国内に整備する必要性が唱えられていた。

以上が、東京朝日新聞の記事などから見えてきた「倫敦中国芸術国際展覧会」をめぐる事の顛末である。

この動向は、東京朝日新聞ほどではないが、読売新聞にもとりあげられている。昭和10年９月11日付朝刊に、「実物の旅に保険70万円、わが逸品ぞろい41点出品と決定、ロンドン美術展へ」とあり、「倫敦中国芸術国際覧会」への強硬な出品の反対がありながら、最終的に日本から出品されることになり、しかもそれらが70万円を保険料として支払うほど、質の高いものであったことが強調されている[31]。いずれにせよ「倫敦中国芸術国際展覧会」への出品への可否は、日本側としては質の高い作品を出品することで決着がついたのである。

このように「倫敦中国芸術国際展覧会」に関わる動向を新聞記事で確認した結果、同展覧会への参加の可否が、大きく問われていたことがわかった。参加を実際に強く拒んだのは、重要美術調査委員の瀧精一であり、宮内省、文部省、外務省はそれとは逆に出品をすすめ、日本側の立場は決して結束していなかった。参加しない理由には、準備時間が少なく、重要な作品を搬出する法規制が関わることなどが、挙げられていたが、特に反対派の立場での理由として見逃せないのは、「リットン報告書で有名なリットン卿」が関与したことで、日本側への関心が低い、と捉えられたことである。つまり、芸術展でありながら、日本側にとって、また美術の専門家の瀧にとっても、政治的に都合の悪い評価を下したリットン卿がクローズアップされるなど、「倫敦中国芸術国際展覧会」には政治的な意味合いが生じていることが理解されるのである。だが、外務省などは出展の意向を示しており、そうした認識とは異なった立場にあった。そこで同展の政治と複雑な結びつきについて、さらに当時の新聞から考察したいと思う。

４　日本の新聞記事と「倫敦中国芸術国際展覧会」（２）政治的な意味合い

「倫敦中国芸術国際展覧会」への出品の賛否には、一見すると出品作品の搬出といった美術に関する問題のみに限定されていた、と考えられるが、前述したように、政治性と無関係ではなかった。そのことをより明確に裏付けるのが、昭和10年５月３日付けの読売新聞の記事である。

同日の新聞には、「対支借款問題、英国暗躍、鉄道利権獲得へ」の記事が掲載されている。そ

れは、英国が中国への借款を日本からの承諾を前提にしていたにもかかわらず、秘密裏に行っていたことを暴く内容である。記事によれば、中国は英国から70万元の融資を仰ぐ努力をしており、そのかわりに英国側では、鉄道利権を獲得しようとしていた。その際に、中国が英国から借款を得るために担保に出したのは、「倫敦中国芸術国際展覧会」に出品している美術作品であった。つまり、この記事の内容を信じるならば、日本を蚊帳の外において、中国と英国とが秘密裏に取引をしていたのであるが、その取引を可能にするのに「倫敦中国芸術国際展覧会」が一役買ったことになる。

範麗雅氏は、「倫敦中国芸術国際展覧会」を、英国の知識人の中国伝統文化の理解から考察した際に、この展覧会が「中英両国の政府と民間からの強い支持を得た」もので、「美術と誠意とを見事に結合させ、予想を超える『文化外交』上の勝利を収めた空前絶後の一大国家企画であった」とも指摘していた[32]。

そうした英中の友好関係が、対日から生じていたことは、既述したように同展の展覧会図録に記載されているとおりである。

1930年代の国際情勢からしても、英国と中国の友好的な関係は、単なる交流でなく、対日を目的とする軍事的な繋がりであることはまちがいない。すなわち、三国同盟締結と同じ時期に、蒋介石は重慶政権のためにアメリカから１億7500万ドル、英国から1000万ポンドの借款を得ていた。極東では1931年の満州事変から1937年の日中戦争開始にいたる危機が続き、日中の対立が激化していった[33]。同地に権益を有する英国は、日本に対する宥和と制裁の両面から、極東情勢への対処を探っていたといわれるからである[34]。

他方、このような中国と英国の接近は、ドイツの政治政策からすると、困難な状況に陥ったことを意味する。というのは、ドイツでは1935年の再軍備宣言から、英国など周辺国の間の緊張を高める外交・軍事政策が続き、極東外交における親中派と親日派の駆け引きがなされていたからである。周知のように、1936年10月には日独防共協定が締結される。中国では、日本の戦略の前に抗日論が高まり、そのなかには、日本に対抗する国際グループの形成を目指して、抗日外交戦略を求める議論があったといわれる[35]。このような情勢のなかで、ロンドンで中国政府の関与する「倫敦中国芸術国際展覧会」が実現したのである。英国が中国政府をいわば支持したことを暗示するこの展覧会は、大成功をおさめた。そしてそのことは、ドイツにとって、結果的にリッベントロップに導かれる親日派が力を増すことになったのである[36]。また、日本政府にとっても、展覧会の参加で日本側の足並みがそろっていなかったが、それもまた、ドイツ同様に政治的な立場がこの時点では明確になっていなかったためであり、最終的に、日本もドイツとの関係を重視してゆくことになる。

ところが、そうした政治的な英中関係は、ベルリンでの日本古美術展を長らく希望してきたドイツの美術史家にとって、むしろ好機に映ったと想定される。すでに「倫敦中国芸術国際展覧会」の翌年に、「伯林日本古美術展覧会」への国宝の持ち出しの許可を得るために来日した主催者のひとりキュンメルは、1938年の「東亜美術協会、定例研究会」での挨拶の際に、「来る日本展は、少なくともロンドンにおける中国展と同じくらい重要なものになる」と、先の中国展に対抗意識を滲ませていたからである。

さらに同年には、英国政府から要望されたロンドンでの日本古美術展の開催を、日本側は外務省、文部省、宮内省との協議の末、固辞した。『国華』第47編第２冊によれば、国宝などの作品の海外への搬出が困難なことや、皇紀1600年の祭典およびオリンピック大会に合わせて国内で古美術の大展覧会を催す必要があることを理由に、拒否したという[37]。

しかし、翌年の８月の『国華』第48編第７冊の「雑録」では、一変して、ベルリンで日本古美

術展が開催されることが、国宝と重要美術品の作品リストを掲載しつつ、告知された。ロンドンでの開催を拒否した日本側が、ベルリンで許可したのは、国宝の輸出が困難ななかで「今回の貸与は防共協定を結べる友邦独逸国へ対して今次事変下に於て国策上誠に已むを得ざるものなりとの、外務文部両大臣よりの説明もあり、遂に可決を見るに至つたものと云ふ」として、防共協定という軍事的な理由から、ベルリンで実現したことを明示している。「倫敦中国芸術国際展覧会」で日本側は、海外搬出の問題で出品を固辞した重要美術調査委員会の瀧精一と、逆に賛同した日英協会関係者の細川護立らと立場を二分して問題となったが、1939年のベルリン展では、瀧の名はないが、重要美術調査委員会にも承諾を得、国宝保存委員会からは、日本史学者荻野仲三郎と、そして同委員会長細川護立が、展覧会の委員会に名を連ねていた。ロンドンでのことを考えれば、国宝、重要美術品の海外搬出が異例なレベルで搬出されたベルリン展でも合致したことには、相当に大きな力、すなわち日本政府および民間も一致させるほどの政治的に強い権力が、その背景に存在していたにちがいない。それはまさしく、第二次世界大戦に向けて、英中に対抗する日独の軍事的な関係こそが、それを後押ししたといえるだろう。そして最終的にベルリン展は「是れ固より空前の例でもあり、又絶後でもあるであらう」という展覧会になったのである[38]。

このように、日本が参加に曖昧な態度を見せつつ、最終的に英国が中国との政治的な関係を密にする意味合いをもった「倫敦中国芸術国際展覧会」の実施を受けて、ドイツは政治政策の相手に日本を選択し、日本側もまた政治的な相手をドイツに選択したことで、英国からの要望であったロンドンでの日本美術展を断って、厳格な法を異例づくめで解釈し、ドイツでの日本の古美術展を実現することになったと考えられるのである。

おわりに

「倫敦中国芸術国際展覧会」は、西欧における東洋への関心において、日本ブームから中国ブームへと転換したひとつのマイルストーンとしての価値が指摘されている。しかし本論で考察したように、この展覧会を、1939年に開催される「伯林日本古美術展覧会」の開催経緯と並行して見るならば、単なる国家間の文化交流でなく、まさに第二次世界大戦へといたる当時の政治的な動向に合わせて芸術展覧会の開催が決定していたことを裏付けるものであり、むしろ政治的な役割を強く担った動向であったと見なすべきであろう。

本論文の調査は、科研（課題研究番号23652016挑戦的萌芽研究、代表者木島史雄）によってすすめられた。

1　たとえば以下を参照。拙稿［1939年『伯林日本古美術展覧会』と報道：日本美術の評価と展覧会の意図をめぐって］『美學』59号、2008年、71－89頁。「ドイツ第三帝国下の日本美術史研究とユダヤ人研究者」『別府大学大学院紀要』10、2008年、75－88頁。拙稿「1939年の「伯林日本古美術展覧会」の報道と新聞・雑誌批評－－国家意識と美術の関係を指標にして――」五十殿利治編著『「帝国」と美術　1930年代日本の対外美術戦略』国書刊行会、2010年、155－158頁。

2　範麗雅「1935年のロンドンにおける中国芸術国際展覧会―中国の伝統芸術・文化に関する英国知識人の言説の検証を指標に」稲賀繁美編著『東洋意識　夢想と現実のあいだ　1887～1953』ミネルヴァ書房、2012年、253－300頁。塚本魔充「勝固と矢代幸雄：ロンドン中国芸術国際展（1935－36）と中国芸術史学会（1937）の成立まで」『LOTUS、日本フェノロサ学会機関誌』2007年、１～18頁。Vivian Yan Li: *Art Negosiations:* Chinese International Art Exhibitions in the1930s, Ohio State Univ. 2006.

3　東京朝日新聞では、「支那美術大展覧会」（昭和10年３月27日付記事「英京の「美術展」にお相伴は御免だ

参加説と対立状態　　例のリットン卿が委員長＜写＞」）と、「支那美術展」（昭和10年５月22日付け朝刊「国宝搬出は困難、ロンドンの「支那美術展」に日本不参加を表明」）を用いている。展覧会の出品目録は、『参加倫敦中国芸術国際展覧会出品目録』（1935年）として、「倫敦中国芸術国際展覧会」と記載されている。

4　範麗雅、前掲論文、254頁。

5　範麗雅、前掲論文、254－255頁。

6　『書画』と『参加倫敦中国芸術国際展覧会出品目録』昭和11年。

7　範麗雅、前掲論文、256頁。

8　矢代幸雄『日本美術の恩人たち』文藝春秋、1961年、134頁。

9　矢代幸雄「海外に於ける日本美術」『美しきものへの思慕』岩波書店（『世界』1951年、３月号）、1984年（以下矢代幸雄、「海外に於ける日本美術」と略記）、232－234頁。

10　矢代幸雄、「海外に於ける日本美術」、233頁。

11　矢代幸雄、「海外に於ける日本美術」、233頁。

12　矢代幸雄、「海外に於ける日本美術」、233－234頁。

13　矢代幸雄、「海外に於ける日本美術」、234頁。ところで、この矢代の「倫敦中国芸術国際展覧会」について、事実関係にずれが認められる。塚本磨充氏は「勝固と矢代幸雄　－ロンドン中国芸術国際展覧会（1935－36）と中国芸術史学会（1937）の成立まで―」の論文のなかで、「倫敦中国芸術国際展覧会」を起点として矢代と勝固の関係を指摘しており、その際に、矢代がロンドン展覧会の外国委員の一人として参加していたこと、それによって、ロンドン市民に向けて中国絵画の講演をおこなったことを書き留めている（塚本磨充前掲論文、12頁）。しかし前述の如く矢代自身の言葉には、これについての言及は全く見られない。このことからも、矢代は客観的にすべてを語らないところが見受けられる。おそらく矢代が言及しなかったのは、委員だったことなどを捨象して、少し大胆にあとで回想している可能性が考えられる。

14　『伯林日本古美術展覧会記念講演会　日独文化の夕』伯林日本古美術展覧秋委員会、昭和14年、11頁。

15　矢代幸雄、「海外に於ける日本美術」、234－235頁。

16　矢代幸雄、「海外に於ける日本美術」、235頁。

17　拙稿「1939年の「伯林日本古美術展覧会」の報道と新聞・雑誌批評　－－国家意識と美術の関係を指標にして――」五十殿利治編著『「帝国」と美術　1930年代日本の対外美術戦略』国書刊行会、2010年、151－210頁。

18　東京朝日新聞、昭和10年３月27日付朝刊　「英京の「美術展」にお相伴は御免だ、参加説と対立状態、例のリットン卿が委員長＜写＞」

19　東京朝日新聞、昭和10年３月27日付朝刊　「英京の「美術展」にお相伴は御免だ、参加説と対立状態、例のリットン卿が委員長＜写＞」

20　東京朝日新聞、昭和10年５月22日付朝刊「国宝搬出は困難、ロンドンの「支那美術展」に日本不参加を表明」

21　会津藩出身の外交官。1860年生まれ。1939年没。

22　熊本出身の政治家。国宝保存会会長。1883年生まれ。1970年没。

23　大阪出身の考古学者。京都大学名誉教授。1881年生まれ。1938年没。

24　福井出身の宮内官僚。1908年オックスフォード大学を卒業。1934年式部長官。1946年宮内大臣。1882年生まれ。1948年没。

25　三重出身の実業家。山陽鉄道から大倉組に入り、経済的な面で欧米と交流。1867年生まれ。1958年没。

26　東京朝日新聞、昭和10年９月４日付夕刊「「麟盃」を御貸下げ、支那美術展へ近く発送」

27　東京朝日新聞、昭和11年２月８日付朝刊「美術界に突如一投石、「文部省反省せよ」と職を課す瀧博士、海外搬出のもつれ／文部省側の弁＜写＞」

28　東京朝日新聞、昭和11年２月８日付朝刊「美術界に突如一投石、「文部省反省せよ」と職を課す瀧博士、海外搬出のもつれ／文部省側の弁＜写＞」

29　東京朝日新聞、昭和11年２月８日付朝刊「美術界に突如一投石、「文部省反省せよ」と職を課す瀧博士、海外搬出のもつれ／文部省側の弁＜写＞」

30　「英国アカデミイの東洋古美術展と我国の什宝」『国華』第46編第１冊、昭和11年１月、33頁。

31　読売新聞1935年９月11日付、朝刊「実物の旅に保険70万円、わが逸品ぞろい41点出品と決定、ロンドン美術展へ」

32　範麗雅、前掲論文、95－97頁。また井尻千男氏は、イギリスの軍艦サフォーク号で宝物を運び、開催された「倫敦中国芸術国際展覧会」の意味を、対日本を視野に入れつつも、満州国の成立に対する南京政府の権力と権威の正当性を、世界に認知させる機会と捉えている（井尻千男「美のコンキスタドール　連載36」『選択』選択出版社、2006年６月号、94－95頁）。

33　石川禎浩『革命とナショナリズム、1925－1945、シリーズ中国近現代史　３』岩波新書、2010年、77－79頁。

34　佐々木雄太『30年代イギリス外交戦略』1987年、49－52頁。成瀬治他編『世界歴史大系、　ドイツ史３、1890年～現在』山川出版社、1991年、303－308頁。アヘンをめぐり、英独日が駆け引きをしたのもこの頃である。後藤春美『アヘンとイギリス帝国、国際規制の高まり、1906～43年』山川出版社、2005年、37－168頁。

35　土田哲夫「1930年代中国の国際観と外交論　－　包華国『国際政治興中日外交』を事例として―」『中央大学論集』第24号、2003年、51－52頁。

36　田嶋信雄「親日路線と親中路線の暗闘　－　1935～36年のドイツ」工藤章・田嶋信雄編『日独関係史　1890～1945　　II　枢軸形成の多元的力学』東京大学出版会、2007年、８－53頁。　アストリート・フライアイゼー「日本占領下の上海と二つの在留ドイツ人社会」工藤章・田嶋信雄編『日独関係史　1890～1945　　III　体制変動の社会的衝撃』東京大学出版会、2007年、108－116頁。範麗雅、前掲論文、97頁。

37　「我国宝其他の古美術品展観に関する英国の要求拒絶」『国華』第47編第２冊、昭和12年２月、65－66頁。

38　「雑録」『国華』第48編第７冊、昭和13年８月、238－239頁。

欧文要旨

Die Internationale Chinesische Kunstaustellung in London, die von November 1935 bis März 1936 abgehalten wurde, gilt als der Wendepunkt von japanischer zu chinesischer Mode in Europa. In meiner Abhandlung wurde diese Ausstellung in Zusammenhang mit der altjapanischen Kunstausstellung Berlin 1939 untersucht. Ergebnis ist: Die Internationale Chinesische Kunstausstellung in London wurde zwar als Kulturaustausch zwischen England und China veranstaltet, aber spielte auch eine politische Rolle als Schau der engen Beziehung beider Länder, die hauptsächlich gegen Japan gerichtet wurde. Beiden Ausstellungen, der Londoner 1935 und der Berliner 1939 wurden die politische Inszenierung in der Auswahl der Allianzpartner aufgetragen.